2008年4月1日　第三種郵便物認可

SANKEI EXPRESS

www.sankei-express.com

01|01 Tue.
元日

¥100

2013（平成25）年　日刊2192号

月ぎめ¥2,100（税込み）

4910853710130
00095

新しい学びの場が必要だ

天童荒太さんを乗せたワゴン車は、仙台市から三陸自動車道を北に向かい、牡鹿半島の付け根にある漁業の街・宮城県女川町に着いた。人口1万人あまりの街をあの日、高さ20㍍の津波が襲い、住宅のおよそ8割が倒壊、町民の1割近くが命を奪われた。車窓に流れる景色は、港湾の新しい冷蔵倉庫が目立つ以外、壊れたままの住宅や、ひしゃげたガードレールがそのまま残る。

多くの住民が仮住まいのまま2度目の年を越し、生活再建はほど遠く思えるこの地でも、若き社会起業家のまいた種が芽吹きはじめていた。

若者の決意

首都圏でキャリア教育を行ってきた「NPOカタリバ」（東京）（※①）が2011年7月に開校した放課後教室「女川向学館」（※②）。被災した子供たちに新しい学びの場を作ろうと、全国から若者が集まっていた。震災後、避難所として使われ、グラウンドに仮設住宅ができて空いた町立女川第一小学校の校舎に、夕方、地元の小学1年～中学3年生を集めて、塾形式の学習指導や、心のケアを行っている。

向学館のスタッフは短期ボランティアを含め23人。そのうち津波で自宅と職場を同時に失った地元出身の塾講師は7人、あとは女川には縁もなく、都会から働きに来た20～30代の若者だ（※③）。

夕暮れ時の校舎に入ると、幼く元気な東北弁に、「教室はこっち」と標準語の若い声が重なって聞こえてきた。

子供から「あやねえ」と呼ばれる諸戸彩乃さん（32）は12年5月、東京の広告代理店の契約社員を辞め、向学館を運営する「NPOカタリバ」に転職した。もともと子供好きで、会社員時代もCSR部門で小学生向けの科学教育を担当。やりがいもあった。

転機は東日本大震災。仙台に住んだことがあり、被災地で何が起こっているのか知りたかった諸戸さんは12年2月、被災地復興に携わる社会起業家が都内で開いた人材募集の説明会へ足を運んだ。

「被災した子供たちはその悲しみを強さに変えて、日本を背負っていくかもしれない」。耳に飛び込んできたのは、女川向学館のスタッフを募ろうと、被災地の子供の可能性を熱く語る、NPOカタリバの今村久美代表理事（33）の声だった。

「これだ、本当にやりたいことは」。震災後、「与えられた命を、ちゃんと生きなきゃ」という思いがくすぶっていた諸戸さんは、その場で女川に行く決心をした。

教員免許を持つ諸戸さんは、向学館で小学1年～4年生の合同クラスを週2コマ、中学3年生の社会科を週2コマ受け持つ。ほかにも、生徒の質問を受け付ける自習室の監督業務や、被災3県の中・高校生を対象にした「OECD（経済協力開発機構）東北スクール」のプロジェクトにも携わる。

平日は午前10時半ごろ出勤、定時は午後10時だが、時に深夜、週末も仕事をして過ごすことが多い。事務作業量は多く、常にノートパソコンが手放せない。

震災の影響もあるのか、子供が落ち着きのない様子を見せることがある。不安定な気持ちを落ち着かせ、学ぶ意欲を引き出してあげるにはどうしたら…と悩んだ。他の職員と相談し、「ほめて伸ばそう」と決めると、諸戸さんは「子供が目標を書く欄」と「先生がコメントをつける欄」が1枚になった「がんばろう！シート」を作成。授業前に子供たちに書かせて、交換日記のようにやりとりするようにした。

ある時、小学校の授業参観に行くと、向学館では少し落ち着きがなく気がかりな小2男児が、手を挙げて発表した。諸戸さんが「がんばろう！シート」に「すばらしかったよ」と書いて渡すと、翌日、男児は照れくさそうにシートに「ありがとう」と書いて寄こした。最近、向学館の授業にも集中し、解くプリントの枚数が増えてきたのがうれしい。

試行錯誤、子供との向き合いは、うまくいかないことも多い。が、「愛をもって子供と接すれば、伝わるという実感がある」と諸戸さん。仕事は山のようにあるのに、給与は前職の3割減。自宅に戻ると、くたくたで食事もせず、すぐベッドに潜り込む毎日でも、「今は、休みの日もずっと仕事のことを考えていて、それが楽しい。顔を洗わなくても眠れるように、女川に来てからは顔にファンデーションを塗るのをやめました」と、明るい表情で語った。

㊧女川向学館のスタッフは、子供たちの兄姉のような存在。親しみやすいニックネームがついている
㊨勝負の日まで、あと少し

㊧放課後、女川向学館にバスで向かう小学生。窓の外に流れる景色は、傷ついたまま
㊥授業の前に、職員会議。まだ子供の声がしない静かな校舎に「がんばっぺ！」のかけ声が響く
㊨悪ふざけする子供には毅然と注意

若者たちは被災地・女川に集まった

向学館の一日

「今日も一日、がんばっぺ！」。午後3時40分、職員室で総立ちのスタッフがはつらつとかけ声をあげ、女川向学館の一日が始まった。

壁には「進」「攻」などスタッフが決意をしたためたカード、「受験まであと○日」と書かれた大きな日めくり。拍手で会議を締めたスタッフは、慌ただしく玄関や廊下の電気をつけ、子供たちを迎える準備を進めた。

4時10分、送迎バス(※④)を降りランドセルを背負った十数人が、わいわい向学館に駆け込んできた。子供に負けじと、スタッフがいっそう声を張る。

4時20分、授業開始まであと5分。小学5年の教室をのぞくと、逆立ちのうまさを競う男子軍（女子1人含む）の脇で、女子チームはおしゃべりに夢中。「実は勉強は好きじゃないけれど、ここで友達といるのが楽しい」と5年生の木村千尋ちゃん(11)は笑顔だ。平地が少ない女川では、仮設住宅が点在して建ち、中には車で約20分離れた石巻市内から通学する子もいる。一度帰宅すると遊ぶ約束がしづらい子にとって、向学館は放課後、友達と過ごす貴重な居場所だ。

小学生の授業が始まった。5年生が教室で「計算王決定戦」の小テストを終えようとする午後5時20分、ジャージー姿の中学3年生が一人、また一人と自習室にやってきた。衝い立てで個室のように仕切ったレイアウト。壁に「一、自習室内の私語禁止」「一、注意されたことは素直に聞く」など7つのルールを模造紙に書いた「大日本自習室憲法」。ともに、頻繁に自習室を使う中3生が率先して、スタッフに相談しながらあつらえた。自分で決めたルールだから、話し声は聞こえない。鉛筆の音と、張りつめた空気が、仕切り越しに漂ってきた。

この日、自習室で生徒の質問を受け付ける担当は、北海道での酪農生活を辞め、学習サポーター（有償ボランティア）になった岡山出身の「きよ兄」こと阿曽沼陽登（あそぬまきよと）さん(23)。気さくな人柄のきよ兄が相談を受けるのは、数学問題の解き方だけではない。友人関係、進路や志望校のことなど、自習室を出ても、子供の悩みを聞いている。

呼び名で分かるとおり、スタッフと子供の関係はお兄さん・お姉さんのよう。「先生でも親でもない。真剣に話を聞いてくれる近しい大人がいることにも、向学館の意味がある。僕は教育の専門家じゃないし、彼らも解決策を求めているわけじゃない。彼ら自身が考え答えを見つける助けになればと思います」。きよ兄自身、向学館のあとの進路を少し悩んでいた。「ここに来て考え方や世界が広がった気がする。どの道でも、将来、人とつながる仕事がしたい」と話す横顔を、子供たちが見ていた。

時計の針が6時に近づき、窓の外の女川一小仮設住宅でそろそろ夕食のだんらんが始まるころ、向学館の廊下では、空揚げを詰めた大きなおにぎり（100円）が販売されていた。中学生の夜食にと、食堂を経営する子供の保護者が毎日握ってくれるという。向学館とスタッフは、地域を支えているようで、実は地域から支えられてもいた。

午後9時前、中3受験生も家路についた。「さあ、始めようか」。向学館の職員室では、ミーティングが始まり、明かりはしばらく消えなかった。

スタッフの一人一人が、決意をしたためたカード

KEYWORD

①ＮＰＯカタリバ

2001年、慶応大学生だった今村久美さんらが設立。06年にＮＰＯ法人化。大学生や社会人が高校・大学を訪ねて進路の悩みや興味のある分野を生徒と語り、将来への可能性や意欲を引き出すキャリア学習プログラム「カタリ場」を実施。11年度は112校で2万2781人が参加した。

②女川向学館

女川町の小中学生の約3割にあたる194人が学ぶ。当初は無料、12年度から授業料が月3000～5000円。女川が誇る「港（こう）」と「向学心」をかけ地元小学校長が命名。11年度は中3生全員が第一志望校に合格を果たした。

③20～30代の若者

向学館で働くスタッフの経歴はさまざま。転職組では元地方紙記者(30)をはじめ、一時は元官僚(38)も在籍。ボランティアとしても、教員志望の元大学職員(34)や休学してきた大学生らが働く。

④送迎バス

女川向学館は子供の送迎用バスを毎日運行している。通常、向学館までは町内3小学校が合同で使う女川第二小学校と、2つの中学が合同で使う女川第一中学校からの迎えの便があり、帰宅用には3方面に7便を出す。

「自分で開拓すれば人生は変わる」

昨年12月11日午後2時46分。大震災が発生したその時間に、横倒しになったビルを見下ろす宮城県女川町の高台で、天童荒太さん(52)と「NPOカタリバ」代表理事、今村久美さん(33)は手を合わせた。2人は今村さんが校長を務める女川向学館に場所を移し、仮設住宅が窓から見える教室で、互いの青春時代のエピソードを披露しながら語り合った。

天童荒太さん(以下天童)　実は僕、被災地だから、ということで来たわけではないんです。今、「生きたい」という意思はあるのに、それが阻害されている状態に世の中がなってしまっている。僕は『歓喜の仔』で、この生きづらい世界で生き抜く方法を模索した。その一つの答えは「つながる」ということだった。今村さんたちは、実際の活動の中で、その生きづらさを、人と人をつなげることでブレークスルーしようとしている。そういう人にお会いして、つなぐことの意味を考えたかったんです。

今村久美さん(以下今村)　もともとカタリバ(5面参照)を立ち上げたのも、学校という場に閉じ込められてしまう子たちを、社会に対して何らかの形で接続させたかったからです。成功者による講演会ではなく(※①)、身近な先輩が、自分たちも悩んでいるんだという姿を見せ、互いに語り合う。

天童　カタリバというのは、硬直化した仕組みと人とを揺り動かすためのものだった。では、女川向学館での授業の内容は。

今村　基本的には、学校の勉強をサポートすることです。最初、私は集めた募金を渡そうと被災地に来たんですが、被災した人が本当に必要としているのは何なんだろうって考え始めた。そこでいろいろ調べて、地元の人に話を聞いて、やっぱり教育だ、と。最初はイベントなども考えたんですが、保護者や生徒のヒアリングをするうちに、やはり必要なのは塾だ、となった。もともと女川を選んだのも、8割の住居が流され学習塾を復興することはできないからです。

天童　なぜ教育が大事だと思うの?

今村　私は両親も含め、周りに大卒者がいない環境で育った。勉強も全然できませんでした。新聞に投稿を繰り返して、それを特技としてAO入試を受けて、大学に入れたんです。私は、本来はすごく自信がなくて、前に出て行くのはちょっと…と思ってしまうタイプ。でも、大学で出会った人は、勉強だけではない多様ながんばり方をして、すごく生き生きしていた。一方、地元とか大学の外の友達は、生きづらさを感じて苦しんでいる。自殺した子も何人もいます。私もそうなっていたかもしれない。彼らと、私の差はなんだろう。自分で開拓していけば人生は変えられることに気づけたという、ほんのわずかな差なんです。彼らは、本当に自殺しなきゃいけなかったのかな。ちょっと見方を変えることが、大きなチャンスになる。みんな平等に機会はあるべきなんです。

天童　子供たちが、「こうなりたい」というロールモデルを手にできていないという感覚はありますか。

今村　日本の強みでもある組織的な同調圧力って、苦しみでもあるけれど、それを乗り越えて成長するという機会でもあった。今は、インターネットという武器を手に入れて、そこに逃げ込める。だから乗り越えることが少ない。逃げ場ができることで、立ち直る意欲もなくなっている。摩擦を恐れて、見えないネットの箱に閉じこもって出て行かない。昔は、暴力なり不登校なり、目に見える形で大人たちが問題を掌握できた。今は見えない箱に子供たちが入り込んで、救出の方法すら分からなくなった。

天童　人と会って話す場所に出て行くことは、自分の劣等感を直視することになる。でも、傷つく場所っていうのは、人を信じ合ったり、高めたり、認めてもらう場所でもある。僕が最近いやだと感じていることがあるんだけど、子供たちがタカをくくって、「分からないのはあんたたちが悪い」って、偉そうに言うようになった。分からないというのは本来恥ずかしいことで、だからこそ勉強やがんばることにつながるのに。「分からない」と言い捨てるのは、実は傷つけられたくないということの裏返しなんだよね。

↗

NPOカタリバ代表理事・女川向学館校長

今村久美さん

いまむら・くみ　1979年岐阜県高山市生まれ。慶応大環境情報学部在学中に「カタリバ」を設立。女川向学館と2011年12月開校の兄弟校「大槌臨学舎」(岩手)を往復し、夫がいる東京にはなかなか帰れない。中学は剣道部。花火を打ち上げることができる資格も持っている。

21回目の月命日の午後２時46分、女川港を一望する高台で、今村久美さん（左）と天童荒太さんは海に向かい手を合わせてから、穏やかに話し始めた

「学び知ることは生存のきらめき」

今村　すごく分かります。今、子供たちは完全なものだけを提示されている。完全なものだけを消費しながら、不完全なものを見ないようにしている。私、関係性で人は発展すると思っていて。『13歳のハローワーク』（※②）的な職業選択方法って嫌いなんです。仕事って、カタログを見て選ぶわけではなくて、人との関係性とか、現実の積み上げですよね。夢を持て！みたいな圧力があるけれど、実際には求人情報から選んで、現実の職業に落ち着く。でも天童さんの言葉を借りると、「私はこの職業に就くから他のことは知らなくていい」とタカをくくるんじゃなくて、身の回りの不思議なこととか、解決できないことに向かい合っていく。その積み重ねが大人になるってことだと思うんです。

天童　今村さんから見て、人間は、あるいは若い命たちは本当は学びたがっていると、感じることはありますか。

今村　学びたい、知りたい、ということは、自分の命を喜ばせる。知らないことを知ることは、新しい自分の発見になっている。生徒たちを見ていて、そう思います。自己肯定感（※③）が低い子は「私、分かんないから」と自分の居やすい箱に閉じこもりがちになる。でも、一回社会の方に引っ張ってあげたら「あっ、そうだったんだ！」と解決できる。そういう小さな成功体験が、次の学び体験への接続になっていくのかな。

天童　僕は今村さんたちの活動を知って、「学びっていうのは、生存本能だな」って直感的に思ったんですよ。知らないことをもっと知りたいというのは、生存のきらめきなんだと思っている。その生存のきらめきが見えた時の喜びが何物にも代え難いから、今村さんはやってこれたのでしょうか。

今村　それは、すごくうれしい質問です。被災地の子供は悲しみを希望に変えて劇的に成長することができる、と信じて活動を始め、去年３月、生徒たちが卒業式で「震災で多くの人と関わって、自分が支援する側に回りたいって思うようになった」と言ってくれた。最初は地域の人の理解がなかなか得られなかったけれど、その言葉に救われました。自分が教える立場になりたい、自分がプロデュースする側にいきたい、ってどんどん意欲がでてくる、それが仕事をするってことなんですよ。「もっと学びたい。分からないことが世の中にたくさんあるから大学に行きたい」という子もいて、日常的な居場所で人と出会わせる機会を作っていく意義を、やっと実感することができたんです。ところで、天童さんはどうして「傷ついて一歩も歩けない」という人を書き続けているんですか。

天童　昔からそういう人たちにシンパシーを抱いていた。英雄が活躍する途中で殺される路傍の人とかにね。でも、『永遠の仔』で虐待について書く時、深く考えた。「この人たちをどう書けるのか。自分の表現のためだけに人を傷つけるのか」って。そこで、この人の立場で書くしかない、自分が虐待を受けた人間として生きる、ということを決めた。その子の年表をノート何冊分も作って。役にどんどん気持ちを近づけていって、目をつぶってわき出すものをわーっと、自動筆記みたいに書いていったんですね。

今村　その立場を想像しまくる、その立場に自分を立たせるというプロセスを踏んでいるから、あんなにも共感できる作品なのかな。私も、被災地に初めて来た時、「被災した人の気持ちが分かるのか」って苦しかった。でも、相手の弱さばかり見ていても分からないだろうな、って思って、避難所に寝泊まりさせてもらった。やっぱり、相手の立場を経験しないと分からないことがある。どんなふうに朝が来るのか。電気が消えるってどんな気持ちなのか。天童さんが作品を書くプロセスと、私がこの場所を作った時にとった方法は重なるというか、私がすごく大切にした部分です。

８面に続く

KEYWORD

①講演会でなく語り合う

カタリバのキャリア教育プログラム「カタリ場」は、高校の総合学習などの時間を使い、身近な先輩役のスタッフと生徒が主に体育館で車座になって話す。スタッフが大学生活や進路選びの失敗なども含めて生徒に語り、将来を考えるきっかけにつなげる。

②13歳のハローワーク

作家の村上龍さんが514種の職業を百科事典のようにまとめ2003年に出版。全国の小中高校で採用され130万部を売るベストセラーに。当時、中学生の「心の成長」を助け、「生きる力」をつけるために、全国の中学で、職場体験活動カリキュラムが普及しはじめていた。

③自己肯定感

自己肯定感の低さは、日本の子供の特徴でもある。財団法人日本青少年研究所（東京）の「高校生の心と体の健康に関する調査」（2011年）では、「私ができることはいっぱいある」の問いに「そうだ」と答えた割合が、米国90％、中国81％、韓国69％に対し、日本はわずか36％だった。

女川向学館の教室で向かい合う今村久美さん(左)と天童荒太さん。
仮設住宅が見える窓からは、やわらかな冬の日差しが注いでいた

「衣食住、それから想像力」

7面から続く

天童　僕は、人間にとって生きていく上で必要なのは、衣食住、それから想像力だと思っている。

今村　分からないことを分かろうとする興味喚起が、生存率に関わると思う。普通に生きていくと、分からないことがどんどん起きていく。その中で、分からない状況に立ち向かおうという力が想像力。分からないものに対して挑むモチベーションって、何物にも代え難いし、学校っていうのは、そこを引き出すものだったらいいなと思う。私、カタリバを立ち上げた最初の7年間、ずっとアルバイトしていたんですよ。昼間は情報会社でバイトして、夜は派遣コンパニオン。周りが大手企業に就職する中、名刺を持っていないことへの劣等感もあったけれど、コンパニオンのバイトで、恋人に虐待を受けながらも依存している人とか、今まで会ったことないような苦しみを抱いている人に出会うことができた。それが今、いろんな相手のことを考えるきっかけになっているのかもしれない。

天童　今村さんたちの活動は、今まで子供たちに可能性を見せたり広げたりしているんだと思っていた。でも実は、想像力の成長を促していることだったんだ。勉強したらこういうことができるようになるよ、と伝えることで、子供たちの想像力を広げている。大人たちがしなきゃいけないことって、自分自身の貧困になった想像力を伸ばすと同時に、次の世代の想像力をいかに伸ばしていくかなんじゃないかな。

今村　子供だけじゃなくて、スタッフたちが得ている学びもすごい。地域のカラオケ大会に駆り出されたり、人と関わってコミュニティーに参画することが、学びの一部になっている。

天童　相互関係なんですよね、教育って。学ぶ立場と教える立場、お互いをつなぐ仕事をされたな、って思う。

今村　「つなぐ」といえば、いじめとかも、塾と学校が手を結ぶことで、町が子供をゾーンディフェンスで見守るってことができるんじゃないかなって。ここの場所で見えたことは、学校の先生に連絡する。学校と一緒に子供を支える。そしたら、未然に最悪な状態を防げる。そんな大人のつながりを作れるよう、今こだわって、努力しています。

天童　それこそが、我々が今後、新しいコミュニティーと社会関係をつないでいく上での、大きな課題だと思う。

取材・構成　津川綾子、塩塚夢
写真　鈴木健児

てんどう・あらた　1960年愛媛県生まれ。86年「白の家族」で第13回野性時代新人文学賞、93年「孤独の歌声」で第6回日本推理サスペンス大賞優秀作、96年「家族狩り」で第9回山本周五郎賞を受賞。2000年「永遠の仔」で第53回日本推理作家協会賞、09年「悼む人」で第140回直木賞を受賞。最新刊に「歓喜の仔」がある。

『永遠の仔』　1999年刊。虐待を受け、養護施設で出会った3人の子供たち。惨劇を引き起こした3人は、看護師、弁護士、警察官となって再会する。幻冬舎文庫、全5巻。各520～600円。

『悼む人』　2008年刊。事故や事件現場を訪れては、命を奪われた人を悼む1人の男。彼をめぐる3人の人物を描くことによって、人の生と死を浮かび上がらせる。文春文庫、上600円、下580円。

『歓喜の仔』　3年ぶりの最新刊。重い運命を背負った3兄妹。闘う彼らの姿を通じ、「人類はなぜ滅びないのか」という壮大な問いに対する答えを導き出そうとした意欲作。読み終えた後、「歓喜の歌」が鳴り響くような作品。幻冬舎、上下各1575円。

編集後記

新しい年の初めに社会起業家を取り上げたのは、彼らが見つめる未来像を分かち合いたかったからでした。

投票率が史上最低だった昨年末の衆院選は、世間のあきらめムードや、選択肢が見つからないまま意志表明をやめてしまった有権者の姿を映したように思えました。でも、天童荒太さんと2人の社会起業家の対談を取材してみると、自分や人を信じてつながっていけば、私たちは前へ進めるのだと納得できました。それは「特別な人」だけの物語ではありません。社会起業家やその仲間たちは、電車で隣の席に座っていそうな人々です。ただ、縮めたその手を自分から少し前に伸ばしてみた。そこが違っていたのでした。

自分が手を伸ばせば始まるんだ。それが「今」を変えて、「未来」に向かうための鍵だったんだ。気付いたのはそんなシンプルなことでした。　(津川綾子)

SANKEI EXPRESS

CONTENTS

1～8、48面
作家・天童荒太 被災地へ
～若き起業家と語る～
41～45面＝ニュース
46面＝エディターズEye「確かな言葉」

NEW YEAR CAFE

9～11面 シネクラブ 前田敦子
12・13面 ぶらぶら街歩き 成田山
14・15面 京都うまいものめぐり
16・17面 今年は着物に挑戦
18面 People 綾瀬はるか
20面 Recommend DVD
21～28面 TVスクエア新春特別版
30・31面 今年にかけるアスリート
32・33面 People キム・ヒョンジュン
34面 People 前田亜季
35面 Recommend MOVIE
36面 People 尾上菊五郎
38・39面 お年玉プレゼント
40面 Recommend BOOK

つながることは楽しい、わくわくするものなんだ

カメラに向かって笑顔でガッツポーズを決めているのは、東日本大震災の被災地、宮城県女川町で失われた「子供の学びの場」作りに奮闘する若者たち。輪の中央にいるのは作家の天童荒太さん(52)だ。新たな出会いを経て、年の初めに天童さんが伝えたいこととは―。

雑賀雄太さんと今村久美さん。被災地で活動する若い2人との対談は、ジャズのセッションのようでした。実際に彼らの〝現場〟へ行き、その空気を感じながら会話を重ねることで、互いに気づかなかったことがどんどん出てくる。そういった発見が、新たな出会いがもたらす大きな喜びです。人と出会い、話すことが、もっともっと可能性を広げることにつながるんだと、改めて実感しました。僕は新刊の中で「生き延びるためにつながる」ということを書いたけれども、今回、もう一歩進んで、「つながることは楽しい、わくわくするものなんだ」と思えました。

彼らの活動はとてもスマートで、新しい世代特有のやり方に見えるかもしれないけれども、実は「これでいいのかな、何かできないかな」と社会に対して疑問を感じている人の数は、いつの時代もそう変わらない。それを、今の我々の世代でどう有効な実践につなげ、輪を広げていけるのかが、課題なのではないか。

これは僕の持論なんですが、草食男子、つまり相手の気持ちを慮(おもんぱか)れる人が増えているのは希望だと。慮れることは、全然悪いことではない。人のことを思いやる気持ちを持っている人はすごく多くて、それにどうきっかけを作って、つなげていけるのか。多くの人を巻き込んで、あるいは、多くの人がそれをきっかけにして「自分でもできるんだ」と思える。つなぐことを力に変えていきたい。

2人に会いに行ったこともそうです。何かしたいけれどできない、何かしたいけれどかえって傷つけるのではないか、と思っている人に、「いやいや、やってみないと分からないよ。一歩踏み出した人がここにいるよ」と伝えたい。彼らにとっても、その一歩はものすごく大きなものだったわけではなく、ほんのささいな一歩だったんじゃないかな。

もちろん、踏み出すことの葛藤や恐怖はあったと思います。ただ、それに勝る気持ちの前傾姿勢や、人との出会いがあった。人間って、気持ちを前向きにしていると、出会う。あるいは、出会っていることに気づける。逆に、前向きでないと、出会っていても気づかない。これも「想像力」です。「分からない」と切り捨てることは、守りに入ってしまうこと。

でも例えば、息子とオヤジがいて、オヤジがAKBが分からないとする。するとAKBが悪いのか、ということになるけれど、それよりも、オヤジが息子に「お前、AKBを好きなのか。オレ、分かんないけど、ちょっと聞いてみよう」って言ってくれた方が、うれしいでしょう？ 分からないということを、否定にしてはいけない。実は、深い肯定につながるものなんです。分からないままにするのは、ただただ、〝命〟がもったいない。

今回の2人の他にも、人の知らないところで、すごい人が出てきているかもしれない。知らなかったらそのまま流れていくかもしれないところを、「こんな人がいるんだ」と伝える。そういうことを、広げていきたいですね。 （談）

編集センターから あす2日(水)はお休みさせていただきます

▷ニュースはMSN産経ニュース（sankei. jp. msn. com）、携帯サイト（有料）、フジテレビ系で。

SANKEI EXPRESS
発行所：©産業経済新聞社
〒100-8077 東京都千代田区大手町1-7-2
東京(03)3231-7111(大代表)
www.sankei-express.com

購読のお申し込み
0120-919-005
www.sankei-express.com

配達・集金などのお問い合わせ
0120-34-4646
sale-pro@sankei.co.jp

紙面・記事へのご意見・ご質問
03-3275-8864 平日9時～18時 1～3日休み
u-service@sankei.co.jp

7日間無料お試しキャンペーン中！
首都圏限定。お気軽に、Webフリーダイヤルでご確認・お申し込みできます。

月ぎめ 2,100円(税込み)
1部売り 100円(税込み)

購読料のお支払いはクレジット決済で。
お申し込みは 0120-73-2950
※一部お取り扱いできない販売店があります